

……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅッ♡

「あ……っ♡んう♡ん、あっ♡ん♡っ♡♡」

（どこかで……女の人の鳴き声が聞こえる）

まぶたを持ち上げる気力もないまま、私は意識を取り戻した。身体はまだ深い眠りの中に沈んでいて、指一本動かすことすら億劫だ。

「……………あぁ……っ♡」

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅッ♡

（なんだろう……すごく気持ち良さそうな声……いいなあ）

何かが下腹部に触れている。柔らかくて湿った感触が敏感な場所を這うように動き、そのたびに意識とは裏腹に甘い声が漏れてしまう。

「ひああんあ……っ♡そこ……だめえ……♡」

抵抗も虚しく、男らしいカサついた指先がまるで駄々っ子をあやすように、くるりとクリトリスの先に円を描く。

お腹の圧迫感が苦しかったけれど、それより気持ち良さと多幸福感が凄くて、無意識にでも反応してしまう自分の身体が恨めしい。

（だって……気持ちいいんだもの……）

目を開けることもできず、私はただされるがままになっている。今はこの快感に身を任せるしかない。それでも、激しくなる淫猥な声もあって、意識が浮上してきたせいか、少しずつ周囲の状況が把握できるようになってきた。

「やあ……つよい……っ♡くりすごいっ♡くりすごいのおっ♡♡♡♡♡」

(……あ、あれ……?)

温かい液体がお股からお尻の割れ目を伝う。触れられるところが全部性感帯に書き換えられてしまったかのよう。ゆるやかに広がっていくその熱に、思わず眉間に皺が寄った。

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅッ♡

「あああっ♡んう♡ん、いやあっ♡やあん♡やっ♡やだやだ♡もうクリやめてえええッ……♡♡」

(このこえ……わたし……? 私が出してる……?)

「ん、あ……ああッ♡♡ひいんッ♡♡いやあ……ッ♡な、なに、これ……? わたし、どうして……あ、いやあ……ンン……♡♡♡♡♡」

足を閉じたいのに、クリトリスを優しくピンピン♡グリグリ♡弾かれて、甘い蜜穴が勝手にひくひくして、大きなモノを締め付けてしまう。

じゅん……♡キュンキュン♡♡♡

ズリユリユリユ………ゴチュンッ!!♡♡♡

（わたし……今、クリを責められて……お、おまんこに……おちんちん入れられている、の……??）

目を閉じた状態では、より意識が下半身に集中してしまう。

被虐的な甘い快感に、カチカチする目を見開くと、私を抱いている男……『ルイ』は嬉しそうに笑った。

「……すやすやまんこ犯されて、どんな気分？ お姉さん♡」

ぼんやりとした記憶の中で思い出した。

思い出した瞬間、私の言葉を奪い、犯されている子宮口を意識させるような強さで突かれる。

「問題ね……♡ お姉さんのまんこの中のちんこ。ゴムありゴムなしどっちでしょうーか？」

下半身で何かが爆ぜるような感覚と、頭が真っ白になるほど致死量の快感。

「答えは……今から出して教えてあげる……♡」

ずううつつつつちゅん♡♡♡♡♡

ばちゅばちゅ♡どちゅどちゅ♡ばちゅばちゅ♡どちゅどちゅ♡

ばんばん♡ばんばん♡ばんばん♡ばんッ♡♡♡

「……♡♡♡!! あああんっ♡あ♡ああ♡き、きもちいい♡きもちいい♡あついの気持ちいい♡なんで♡わたしの身体、へん♡イクイクやだあ♡ルイ、なにをしたの♡ あた

まもおまんこもばかになるっ♡♡おまんこもうイキたくないのにいっ♡♡ あゝ♡あゝあゝあゝあゝ
ああルイのくるうッ♡♡♡♡」

支配欲に満ちた亀頭で膣内を引っ掛けながら、ひたすら犯される。抜き差しされる度、人の性器が溶け合うダイレクトでリアルな熱の感覚。

お腹を空かせた子宮口を狙い、精子が注がれる生ハメの興奮に、背中を仰け反らせた……。

——これは、夢じゃない。



——数時間前。

冷たい夜風が火照った頬を撫でていく。まだ心臓が暴れている。震える手でアプリを消した。スマホを握りしめたまま、私は雑居ビルの階段にへたりこんでいた。

(どうしよう……)

マッチングアプリで知り合った男性との初デート。最初は普通だった。でもBARに入って薄暗い個室に通された途端、空気が変わった。

「あの……近くないですか？」

「そう？ 普通じゃない？」

肩が触れ合う距離で座り、私のグラスにお酒を注いでくる男は一流企業らしい身なりで、年齢より若く見えた。年上相手に、断ることもできず一口飲むと、急に身体が熱くなってきた。思考がぼんやりする。

「初心な反応して……もしかして、処女だった？」

気づいたときには太腿に男の手が置かれていた。反射的に立ち上がろうとしたけれど、お

酒のせいで足に力が入らず、椅子に戻ってしまう。

抵抗も虚しく、強引にパンツの隙間から指を差し込まれる。

「や……やめてください……!!」

声がかすれて上手く出なかった。男のいやらしい笑い声が耳障りだ。

「大丈夫だって……酒にちょっと細工したし。俺、上手いから、すぐに気持ちよくしてあげるよ」

腕が背中に回り、吐息が首筋にかかる。ぞわりとした悪寒が全身を駆け巡った。

くちゆくちゅ……。くちゆくちゅ……。

ギュツツ——ツグリグリツ!!

「……っ!! いやああっ、痛い! はなしてえ!!」

乱暴で無遠慮な指にクリトリスを引っ張られて、本能的な恐怖に歯がガタガタしはじめた。暴れてパンプスが落ちた。裸足になった方の足を掴み、男は苛立ったように縮こまるクリトリスを強い力で潰した。

「いや……っ——！」

「うるさいな……女が弱点のクリトリス弄られて気持ちいいに決まってるだろ？ 男にクリ弄りされたくてマチアプしたくせに、今更かまるとぶるなよ。優しくしてやってるうちに大人しくしろって」

（ダメ……動かなきゃ……だれか……誰か助けて……っ）

「……コレを気持ちよくできたら、クンニしてやるから……」

男がストラックスのチャックを下げた、その時だった。

——トントントン。

「失礼します。お客様、ラストオーダーの時間です」

低く若い男性の声がドア越しに響いた。

（……店員さん？）

「ああ？　まだそんな時間じゃないだろ……」

男が振り返った隙に、私は勢いよく立ち上がった。ドアを開けた店員さんを振り切って、部屋を飛び出す。

背後で男の怒声と悲鳴が聞こえた気がするけれど、この時の私には構っていられなかった……。

そのままビルを出て、片方だけパンプスを履いたアンバランスなままむしやらに走り、雑居ビルの階段に隠れた。

息が切れて苦しい。バクバク心臓がこわい。足の裏が痛い……私の大事なところが、ヒリヒリ痛い。

震える手で、スマホからマツチングアプリを消して、身体を抱きしめるように縮こまる。スマホの画面が真っ黒になると同時にじんじわ涙が溢れてきた。

夜風は冷たいのに、血液が沸騰しているような感覚。

（どうしよう……どうしよう……身体が、変……）

個室で起きたことが脳裏に焼き付いている。乱暴にされた突起が、パンツに当たただけでひりひりする。アルコールのせいかな、それとも恐怖のせいかな、弛緩した身体がいうことを聞かない。

「……あれ？」

ふと気づいた。靴の片方がないだけじゃなく、お財布の入ったバッグも持って出ていない。

（まずい……スマホしかない……かも）

不安がさらに大きくなる中、不意に階段を上がる足音が聞こえた。途方に暮れて、顔を上げる余裕もなく、ただ膝を強く抱きしめる。

「……お忘れものはこれですかあ？ お姫様」

若い男性の声。恐る恐る目を向けると、そこにはアイドルのような顔の整った……恐らく年下の男性が立っていた。

その手には私のショルダーバッグとパンプス。

「……さっきの……店員さん？」

「違うけど。たまたま一人で飲んでたら、悲鳴が聞こえたからドア越しに声かけただけの、通行人……。てかアンタ、逃げ足速いのな？ シンデレラかよ」

少し気難しそうな釣り上がった眉毛と、高い鼻。切れ長の目。こんな街の夜でも光るように白い肌。綺麗に釣り上がった濃い眉は、恐らくメイクしてる。

180センチメートル後半はありそうな、細い筋肉質な身体に、チャラ男っぽい派手なシャツとシンブルな黒のパンツを着こなしている。じゃらじゃらゴツメのアクセサリーの中、シルバーピアスが似合っていた。

やる気のなさそうな態度で、私にショルダーバッグを返すと、吐き捨てるように言った。

「……けつ。あのクソ男、常習犯だろ、変な媚薬持ってたし。知り合いに引き渡したけど、もつとポコしてやればよかったな」

よくみると、人差し指のリングに血のようなものが付いている気がしたが、頭が回らな

いし、怖くて考えたくない。

「……アンタもアンタだよ。アンタみたいなお姉さんが、あんなツマンナイ男に付いてく
なって。あのままレ○プされたらどうするつもりだったの？」

年下らしき彼は、蹲る私の前に、ヤンキーのようにしやがむと、電子タバコを取り出した。固まる私を覗き込むように、フレイバーを嘔みながら「泣いてたの？」と、低い声で言った。

「だ、大丈夫……ありがとう……えっと、」

「ルイ。俺の名前」

「ルイ……助けてくれて、ありがとう」

私はゴシゴシ目を拭いて、冷静になろうと口角に力を入れる。ぎこちない笑顔だと

しても、なんとか年上らしく振る舞おうとした。

「……病院とか、警察行く？　一緒に付いてこっか？」

私はゆるく首を振る。イライラした感じの、冷たい言い方なのに、本気で心配してくれてるのがわかる。優しいの、知られくないのかな……不器用なのかな。ルイみたいな子は見えない。

「じゃあ……俺も、ここにいよっかな」

「休憩」と、ルイの電子タバコの煙が夜気に溶けていく。恐らくメンソールなのに、甘ったる気をするのは、ルイの香水なのだろうか。どちらにしても確かに甘さは彼から来ている、近くにいと体温が上がり続けているのが感じられた。

ネオンサインが目刺さるように眩しい交差点裏の雑居ビル。私とルイの間には見えない糸が張られているみたいだった。人々の騒めきの中でも、彼の低い息づかいだけが鮮明

に聞こえる。

「え、やばっ……」

ルイの後ろから漏れる小さな囁き声が耳に入る。振り返ると、フリルのセットアップが似合う派手な髪色の女の子。人が立ち止まっていた。

「あの髪型……絶対あのルイじゃん」

「うわ、かつこよ。どこのホスト？」

「違うし！」「○○Tokでめっちゃ流れてくる顔整い！！」元アイドル練習生らしくて、ダンスとかラップとか動画あげてるヤリチン」

「ヤリチンがラッパーポジションやばい〜」

彼女たちの熱っぽい視線が私たちを貫いていく。興奮して大声ではしゃぎながらも、決して近寄ってこない。その距離感に、ルイが小さく舌打ちをした。

「最悪」

それでもイライラした彼の横顔はどこか余裕で。

「ねえー今お姉さんの警備員してて忙しいから、アンタ達に構ってる暇はないんだけど？早く担当のどこでも行ってくれない？」

ルイが手のひらで、しっしつと追い払うと、何故か嬉しそうな女の子達は黄色い声で、ルイにスマホを構えた。

「お姉さん泣かせて悪い男〜♪」

「……あの、ルイは私の忘れたカバンを届けてくれたいい子だから、誤解しないであげて……」

私がおずおずそつと言うと、ルイの唇が歪んだ。

「お姉さん優しい〜！ お姉さんに免じて晒すのは控えるか！ 〜人の写真送るからルイ、Ti○Tokフォローしてね！」

厚底を鳴らし、嵐のように去っていった彼女たちが見えなくなるまで、ルイは目を瞑り、こめかみを揉んでいた。

（……少しだけ、写真欲しいかも。別世界に生きているルイは、たまたま居合わせたから私を助けてくれただけだし……このまま別れたら、もう会えないと思うから……）

ずきん……。

昂を抑えきれないような熱い息を、ルイに気付かれないように堪えていたが、限界だった。B A Rから無視していた違和感が誤魔化せなくなる。切なさを薪にして、下腹部に疼くような熱が集まり始めている。

これは、アルコールだけじゃない——あの男がグラスに何か入れたのだ。

「……やっぱり」

「はあ、はあ……私、身体が……おかしい……」

眩く声が震えた。

こめかみを揉んでいた筈のルイが、じっと赤くなつた私を見つめている。彼の澄んだ瞳孔が僅かに開いた気がした。街灯に照らされた彼の顔には怒りのような色が宿つた。

「……ほんと、何が大丈夫なわけ？ 俺がいないと、また違う男に襲われそうなんだけど」

ルイは溜息をつく、電子タバコを仕舞い、立ち上がって私のそばに再び屈み込んだ。

「……ねえ、もういつそ俺がアンタを助けていい？」

私の汚れた足を、自分の膝に乗せて……ちよつとヤンチャしてる王子様のように靴を履かせてくれた。低いルイの声には棘があつたが、手つきは驚くほど丁寧だった。

「……うん」

「簡単に頷かないですよ？　意味わかってる？　お姉さんの発情した身体が満足するまで、俺が抱いていいかって聞いてるんだけど？」

「う、うん……ルイがいいなら……っわ！」

答えた瞬間、ルイが軽々と私を横抱きにした。

「さすがにここでヤルかよ。上のクラブ、俺の職場だから。アンタが今欲しがってるもん、俺なら与えてやれる。まあ、ただし条件付きだけど……」

私は息を飲んだ。ルイの表情は変わらない。冗談にしては鋭すぎる視線だった。選択肢なんてない。もはやその甘い誘惑を拒絶できなかった。鼓動は絶えず激しく、私の身体はどんどんイケナイ熱を帯びていく。喉の奥が渴いて、何も考えられない。

「ねえ本当にその顔やめて。興奮してくるから」

どくん……どくん……♡

心臓が爆発しそうだ。逞しい胸に抱かれると彼の鼓動も速くなっていた。それが、本物の恋人のように思えて何故か嬉しい。香水と煙草の匂いが混ざる。年下の青年なのに妙に大人びた香りがした。

「言質はとったからな？ ……しっかりつかまってるよ」

長い脚であつという間に階段を駆け上がっていく。

踊り場を過ぎるとき、壁に貼られた看板が目に入った。

「至高のクリトリス責め——《CLUB C》」



「……おいおい、ルイ。そのお姉さんどうしたの？ 攫ったわけじゃないよな？ 職場にお持ち帰りって……わんぱく元ヤンも大概にしろよ」

「可愛い人だね。でも、はあはあして苦しそう……つかやばっ！ 発情してる？ ルイのヒトデナシ！」

「まだヒトだろ……今からは知らんが。それにしても可哀想に、悪い男に何かされたんだろう。ルイが連れて来たんなら文句は言わないが、お客様じゃないならラブホ扱いとして、個室の料金はお前が払えよ」

男の人達が言い合う声が響くけれど、私の視界は霞がかかり、言葉が理解できない。時

折天井の丸い照明が回っているように見える。彼らの視線が私の火照った身体を舐めるように這うのを感じるのに、動けない。

「うるせえ……わかってるよ！ いいから出てけ！！」

ふわりと沈む感触。熱を持った肌に冷たいシーツの布地が心地よい。目を開けようとするが重すぎて無理だ。

「はあ……はあ……ねえ、ルイ……ここって……？」

舌がもつれる。自分の声が甘ったるくて、重くて、他人のものみたいに感じる。

「俺の働いてる店。一部屋貸し切った。だから、安心していい……悪いようにはしないから」彼の指が額の汗を拭った。冷たくて気持ちいい。こんな状況なのに心地よさを感じている自分が信じられない。

「え、乱交しないの？ えー……僕たちにはさせてくれないんだあ。あのルイが、本気なんだあ……ふーん？」

「……っチ」

ぱたん……部屋の扉が閉まる音が響き渡った。

「人きりになったらしい、薄暗い部屋の中、金魚鉢の中の水泡が弾ける音が遠くから聞こえた。外界の喧騒が遮断され、水泡と空調の低い唸りだけが残る。

痛いくらいにバクバクと高鳴っている心臓の音が、ルイに聞こえてしまわないか心配だった。

ルイは静かに私の横に腰掛けた。ベッドのスプリングが微かに軋む。

「あいづらの言うこと、気にしないでいいから……」

彼の指がゆつくりと私の髪を梳く。指先の感触だけで汗ばんだ身体がびくつと跳ねる。自分でも驚くほど媚びるような鼻声が出た。理性なんてとうに溶けている。

綺麗な顔が近づいてくる。薄暗がりの中でも彼のスッキリした輪郭が鮮明に映る。

「キスしても……いいか？」

言葉と同時に唇が触れた。驚くほど優しい接触だった。少しスウスウするフレーバーの甘い香り。最初は羽毛が掠める程度の軽さ。次第に押し付けられ、昂る温もりが共有される。

ちゅ……ちゅぷ……♡

湿った音が耳の奥で反響する。歯茎に沿って舌尖が滑る感覚。にやるにやる気持ちがい。思わず口を開けば待ち構えていたように侵入してくる。

くちゅくちゅくちゅ……くちゅくちゅうッ♡

「んっ……んふう……っ♡ んむう♡ ん、あっ♡ ん♡」

気持ちよさで思考がまとまらない頭で、私の指がルイの袖を掴む。力が抜けて離れないように必死だ。ルイの右手が私の首筋を撫でながら下りていき、鎖骨の窪みで止まった。小さなリップ音を鳴らし優しく甘キスをした。

「こんなに弱ってるのに……どうして会ったばかりの俺なんか信用するんだ？ アンタをこうした、あのクソと一緒にされたくないんだけど。ちょろすぎて心配になる……」

問いかけながらも左手は私の背中を探るように、さわさわ♡さわさわ♡動いている。焦ったさから骨盤が勝手にくねり、自然に足を開いてより快楽を得ようとする。

「だって……ルイは……はうっ♡♡♡♡」

言い終わる前に深く舌が絡み合った。犯すような舌の動きに、粘膜同士が擦れる度に脳髓に電流が走る。媚薬の効果だろうか、それとも単なる性的な興奮だろうか。判別できないほど身体は燃えていた。

「んむつつ!? つぶはっ♡やつ♡あっ……ああんっ♡ふあっ♡♡」

湿っぽいリップ音で分かれたルイの唇に銀糸が引き、次の瞬間にはもう一度重なる。今度は貪るような激しさで口内を掻き乱される。

「終わってから聞くから……今はお姉さんの全部見せて……」

ルイの指が私の顎を固定し、角度を変えながら執拗にキスを続ける。唾液が交じり合う音が耳に張り付き、羞恥と快感が混ざり合った感情で意識が保てなくなる。

長く遅しい腕が背中に回り、シャツの中からブラジャーのホックを探す。キスだけでイケそうな身体は抵抗する力が、どこにもない。器用な指先の感触だけで鳥肌が立つ。

ぷちん……♡ぷるん♡

「んっ……あ……♡」

キスの合間に漏れる吐息を塞ぐように唇を覆われた。彼の舌が上顎の裏をなぞる度にビクビク♡ビクビク♡胸が小さく跳ねる。性的に昂っている証拠だ。積み上げられていく快感に、まるで弱点を探られているようだった。

「ひっ……うあ……つま、まって……♡」

不意にブラを下げられて、乱れたシャツの間からぷるん♡と乳房が露わになった瞬間、背筋に電流が走った。レイは下乳を掴むと、シャツの間から卑猥に胸を突き出す姿にしまった。

もにゅ……♡♡♡むにゅ……♡♡

素肌に触れる指輪の冷たさと、すぐに被さってくる熱い掌の対比。ルイの手は予想以上に大きく、自分の指とは違う関節がゴツゴツした長い指で、包み込むようにおっぱいを覆った。

「熱っちい……媚薬だけの所為じゃないだろ……コレ……」

ルイは下乳をぐっ♡っと持ち上げて、私に自分の乳首を見るよう誘導する。おっぱい全体をもみながら、指がピンピンな乳首を軽く引っ搔く。あまりの恍惚感に脳が焼けて溶けるようだった。

ふにゆふにゆ♡　ふにゆふにゆ♡

カリカリ♡カリカリ♡カリカリ♡カリカリ♡カリカリ♡

痛覚にも似たピリピリする刺激に腰が浮く。彼はそれを面白がるように同じ箇所をカリカリ♡カリカリ♡集中攻めしてきた。

「やつ……そこお……いやあ♡カリカリ、だ、だめえ……っ！♡♡」

抗議の声すら吸い取られる深い口付け。右手でスカートの裾を捲られ、太ももに直に触られる。

BARで男に触られた箇所を、上書きするように、ねっとり摩り、私を感じる部分は優しく撫でた。最初は少しびっくりしたけど、もっと触れて欲しくて、ブラジャーから解放されて自由になった胸が、上下にぶるん♡ぶるん♡揺らしてしまった。

「……あんな男のことは忘れて。今からは、俺と楽しいことしかないから」

囁くルイの声はほの暗い情欲の色を宿しており、内腿への愛撫と共に胸への執拗な愛撫も忘れない。二箇所からの攻めに理性の糸が千切れかけていた。目の前の男を求めて、腰がずくん♡と疼く。

「クリだけじゃなく、ちゃんと胸も感じてるんだ……こんなに乳首硬くして……」

耳元で囁かれる声。そのやたら色気のある声の、形の綺麗な唇から悩ましい吐息が零れる。

「それなのに、ここに酷いことするね♡」

次の瞬間にはルイの唇が左胸の突起に吸い付いた。ちゅっちゅ♡吸い付きながら、甘噛みで転がされる。

ちゅうう……っ♡♡♡ちゅううちゅうう……っ♡♡♡♡

「ひあっ!?! やあ♡♡やあ♡舐めちゃだめ♡くりくりすごいっ♡くりくりすごいのおっ♡♡♡らめえ、やあやあなの♡やだやだ♡やーッ♡♡♡」

レロッ…レロッ…レロッ…レロッ…♡♡♡♡♡

背中を仰け反らせて、予期せぬ直接的な刺激に耐える。歯で甘噛みされながら舌先で転がされて、息も絶え絶えだ。厚みのある胸板に、顔を押し付ける。身長差があるから、すっぽりルイの腕の中におさまってしまう。

「やだやだって……そんなに強請られたら、意地でも虐めたくなるのが男だろうが。やつばアンタ……無自覚に誘って悪いわ」

「あっ♡あっ♡あっ♡♡？ わかんない♡ごめんなさい……♡あん♡さそって、ごめんなたい……♡」

「ねえ……ほんと、どこまで男を煽れば気が済むわけ……っ！ そんなことしたって、俺のちんこが萎えるわけないじゃん。もう、逃さないのにさあ……無駄だって」

ルイの爪先が執拗にぶつくり主張する乳首を弾く。言葉責めと指遣いの同時攻撃に、少ししか残っていない理性が崩壊していく。

彼の視線は熱を帯びて私の胸に釘付けた。生理前でも見たことがないくらい、乳首はツ

ンツ♡と硬く、おっぱいは弾力も上がってばんばんはに腫れている。

まるで、みるくを絞るように、両乳首をきゅうっ♡きゅうっ♡左右交互にひっぱられた。

「……馬鹿で可愛い」

嘲笑うような口調だが、その声音にはゾクゾクするような確かな欲望が滲む。

さすがに抗議しようとしたのに、胸を揉む指のリングが乳首に当たって喘いってしまった。

「ひやああん……♡つめたい……♡♡」